

小グループの演習形式を採用

片山 寿 昭

フ ラ ンス

フランスの大学においては、わが国の大学における一般教育課程に等しいものは形式的には存在していないが、それに似たものはないわけではない。もともと、一般教育は中等教育の役目であり、その上に立つて専門的な高等教育が実施されると考えられていた。さらにその中等教育も、古くは大学および高等専門学校における少数のエリートの専門教育のための準備教育といった色彩が強かったがしだいに一般教育ということが重要視されてきた。人間教育はモンテーニュ以来フランスの教育理念の中心であったのである。

一八八二年、当時アンジェのリセ（高等中

学校）教授であったベルグソンは、学年末の賞品授与式における「専門」についての講演のなかで、一般教養あるいは全般的認識を基盤としてはじめて専門が生きてくることを強調し、リセにおいては専門的ないしは実際的教育よりもむしろ、「知性全体を発展させながら、凡てを包含するのに十分な豊かさ」と、凡てを企てるのに十分な力とを知性に与える¹。古典研究の教育的意義を説いたのであった。また、一九二五年のフランス政府訓令にはつぎのように述べられている。「中等教育は、専門化されない調和のとれた精神を育成することを目的とし、知識の詰めこみをさける²。一般教養を授けなければならない」と。ところで高等教育にかんしては、一九五九

年一月六日の政令のうちに、その目的が四項目にまとめて表現されている。「①科学的の進歩、研究者の養成および科学的・文学的・技術的研究の発展への寄与。②高度の科学的・文学的・芸術的教養の普及。③広い教養と同時に深い知識を必要とする職業の準備教育、とくに科学的訓練および教育的訓練による教員の養成。④高い水準における教養および職業教育の実施。」³ここに見られるように四項目のうち三つまでが教養に関係していることはきわめて興味深い。すなわち大学の専門課程そのものが深く広い教養を与えるという意味をもっていることである。大学の講義のうちのかんりの数にのぼるものが公開されており、じっさいある教室においては学生よりも

一般市民の聴講の方が多数であるという現象も見られるほどである。またパリ大学の講義がラジオによって放送されていることも周知のごとくである。したがって、専門の科目がそのままで学生と一般市民の教養に役立ち、とくに学生にとっては、専門の学問研究がすなわち教養を高める基盤となっていることに注目すべきであろう。

二

一九四八年以降、理学部と人文学部においては、第一学年に凡ての学生が予科課程を履修しなければならないことになった。(ここで人文学部というのはもとの文学部であって一九五八年にこのように改称された。)この予科課程の修了試験に合格すると、人文学部では「一般文学研究証書」(Le Certificat d'Études littéraires générales)と称される修了証書が与えられ、この証書の取得が、のちに専門課程に進んで学士号その他の学位を得るための最初の条件となっている。理学部においてもほぼ同様の修了証書、すなわち「予備的高等研究証書」(Le Certificat d'Études

supérieures préparatoires)をまず最初にとっておかなければならない。ただしこれは「一般数学および物理学」「数学・物理学・化学」「物理学的・化学的および自然的諸科学」という三つの部門のうちのいずれかを選択すればよいことになっている。この予科課程はその内容にはかなりの相違点があるにしてもわが国における教養部、一般教育課程もしくは基礎科目によく似た色彩をもつ制度である。

さらに医学部進学希望者は、従来から、予めまず理学部において「物理学・化学・生物学研究証書」(Le Certificat d'Études physiques, chimiques et biologiques)を取得しておくように定められている。その他の学部にはまだこの予科課程の制度はないが、いずれ将来には全学部に採用され、さらに進学課程準備センターのようなものが大学内部に設けられて、専門教育の基礎となる講座や一般教養関係の科目が集められるようになるであろうといわれている。

人文学部においてこの予科課程は予備学年(T'Année Propédeutique)とも称され、古典

部門と近代部門の二部門に分けられている。⁴

古典部門は「古典的一般文学研究」(Études Littéraires Générales Classiques)といわれその試験は三科目、すなわちフランス語の論文、ラテン語またはギリシヤ語、外国語(ギリシヤ語、ドイツ語、英語、アラビア語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語のうち一つ)から成っており、この外国語の代りに歴史または地理の論文を選ぶこともできる。

近代部門すなわち「近代的一般文学研究」(Études Littéraires Générales Modernes)の試験もほぼ同様で、フランス語の論文、上述の外国語のうち近代語一つ、さらに第二外国語の三科目で、この第二外国語の代りとして歴史または地理の論文を選択することも許される。このうちフランス語の論文というのは、文学的なもの、哲学的なもの、歴史的なもの、という三種類を含み、そのうちいずれかを学生が選択することになる。

予科課程の全科目はこの証書取得試験を目やすとして組まれ、大教室の共通講義と小グループの演習から成る。講義は文学、哲学(および哲学史)、歴史とそれぞれ週一時間、

これに付随して週二時間の演習が行われ、論文作成の実際の指導、テキストの解説、解釈の練習などがなされる。また、たとえばラテン語の講義（一九五九—一九六〇年度）を見ると、通年二八回の講義があつて、第一回目にはスライドつきでローマの地理が紹介され、ついで第二回目にはラテン語序説、さらにローマの歴史、制度、宗教、文学、語学としてのラテン語などつきつきに多様な内容が織りこまれ、最終回には再びスライドつきで帝政ローマについて語られるといった風である。もちろんこれと併行して演習が実施されることは他の科目と同様である。

また、英語についていえば、共通講義として、文学と文明、文法、文法の諸問題、発音入門にそれぞれ週一時間ずつ四回、さらに小グループの講読と作文がそれぞれ週二回（三時間）、合計すると週八回一〇時間行なわれる。そのさい、将来英語を専門とする者は特別の小グループに入れられる。他の外国語の科目もほぼこれと同様である。

こうした凡ての科目に共通していることは外国語以外の科目においても、大教室の共通講義とともに、つねに併行して小グループの

演習形式が採用されていることであつて、各分野における専門的教養を高めると同時に学生の実力的な実力養成、すなわち講義が演習において学生の血肉化するよう配慮されていることであらう。そのために、かなり多数の助手が演習を指導し、つねに学生と接触してさまざまな具体的問題に答えるような仕組がつくられている。とくに論文作成（もちろん大論文ではないが）はフランスにおいては伝統的に重要視され、問題をどのように理解し、分析し、解釈し、とりわけどのように表現するかということは、つねに学生たちの関心のまところである。その点では、書くということにはほとんど無関心なわが国の教育制度とはきわめて異なっているといわなければならないであらう。

三

以上のような予科課程が設置されるに至った事情について、パリ大学のグイエ教授はほぼつぎのように語る。「中等教育および高等教育の無秩序な現状においては、予備学年の存在は不可欠のものであるように思われる。」⁶この無秩序というのは、中等教育を修了した

学生は高等教育を受けるに適した能力を身につけていないし、大学卒業者もまたそれにふさわしい実力をそなえていないということである。大学に入学する能力のない者が入学し実力のないままに資格を得て卒業するというわけである。これに対して今日の予科課程が完全な成功を示しているかどうかということは、フランスにおいてもいろいろな批判が聞かれる。しかしいずれにしてもこの制度は、さまざまな問題をはらむわが国の一般教育に多少の示唆を与えるものであらう。

- 1 Bergson, *Écrits et Paroles*, t. I, Paris 1957, p. 16. (文学部助教授・哲学)
- 2 J.-B. Piobetta, *Les Institutions universitaires en France*, Paris 1961. 「フランスの大学」ピオベッタ著、中山義、諸田和治共訳（クセシユ文庫）七七一七八頁。
- 3 同書、二五頁。
- 4 Université de Paris, *Lérot et l'Étudiant*, 1959-60, p. 205.
- 5 *Cours et Conférences* (Lectures), Année Scolaire 1959-60, p. 24.
- 6 D. Huisman, *Guide de l'étudiant en Philosophie*, Paris 1956, pp. 36-37.

高校教育との 連繋の緊密化

現在の西ドイツの大学においては、いわゆる一般教育課程は存在しない。しかし十九世紀はじめ頃までは大学は教養学部と専門学部とに分れており、前者においては哲学、修辞学、数学等基本学科が中心に、後者においては神学、法律学、医学が修められていた。当時の大学は中世以来の伝統から未だ教会との結び付きが強く、また教養学部においては高等学校との間に密接な関係が保たれ、例えば教養学部の教科目はしばしば高校のそのの引つぎであり、さらに同じ教師が両方において教鞭をとることもまれではなかった。やがてベルリン大学の設立にともない、ギリシア・ローマ人文主義に基づくフンボルトの理念によって大学の改革が行われたが、その際、教養学部および専門学部の二分割が廃止され、教会に



岡 道 男

ド イ ツ

よる影響に代って、国家に対する新しい関係——国家が機構を管理するが研究は自由に行う——が生れるにいたった。大学において教養学部がなくなり、専門学部のみになったことは、既に高校において「学ぶこと」を学び終えた者、いいかえれば今後自主的に学ぶことのできる者のみが入学を許されることを意味する。ドイツでは周知のごとく高校を卒業すればどこの大学でも自由に入学できるのであるが、そのためには高校において大学教育を受けるに充分な素質が養われることが前提とされており、高校卒業に際しては、大学教師の立合いのもとにきびしい試験が課せられるのである。

*

フンボルトは大学における教養学部と専門

学部との二段階を廃止することによって、教養科目の修得を主として高校に託したのであるが、しかし同時に大学においても、専門科目の修得のみならず、自由な研究との関連において新しい視野に立つ人格の形成を意図したことを忘れてはならない。彼の言葉によれば「大学とは人間が自分自身の中に、自身自身によってのみ見出し得るもの、すなわち純粋な学問にたいする洞察を養う場である。この自己の分別による行為のためには自由と孤独が必要であり、この二つの点をめぐって大学の外的機構ができあがる。講義を聞くことは第二次的な事柄であって、肝要なことは同年代の同じ意図を持つ人々との共同生活において、純粋に学問を高めひろめるために身を捧げる完全な教養人の身近な存在を絶えず

意識しつつ、自己および学問のために数年間を過すことである。」いうまでもなく大学においては高度の専門的研究が優先すべきであり、誰も手をつけぬ領域の研究とあわせて、あらゆる学問の方向が検討されねばならない。しかしそれと同時に、大学における人格の形成をなおざりにするとき、高度に専門化された学問にともなう危険を決して忘れてはならない。最近わが国で専門的知識を具えた医師等の犯罪が世を騒がしているとき、改めてこのことを認識すべきであろう。フンボルトによれば「内なるものから生れ、内なるものの中へ植えつけられた学問のみが性格を陶冶できるのであり、国家にとっても人類にとっても重要なのは知識や言葉ではなく、性格と実行である。」

フンボルトによる大学の改革によって教養学部は廃止されたが、それはあくまでも大学における学問と人格との円満完全なる結合を意図したためであって、大学における「教養」が高校に委託されたことを意味するものではない。この改革では高校で既に「学ぶこと」を学んだ者が、大学では専門的研究における切磋琢磨および古典人文主義に基づく

教養によって完全なる人格を形成することが主要な眼目となったのである。したがって大学においては単に学問研究のためのみでなく人格形成のために「自由」が必要欠くべからざる条件となる。ドイツの大学において学期末試験等が全く行われないのはそのためであって、学生は原則として、国家の監督のもとに行なわれる最終試験を除き、試験から解放されて自由に希望の学問を修めることができる。他方最終の国家試験を通るためには学生の自主性に基く勉強が当然のこととして要求されるのであり、さらに試験においては、専攻の学問についてのみでなく、人類の理想、人間性の尊厳、自由、国家に対する態度等、要するに教養について試問されるのである。

*

他方十九世紀末から現在にいたる自然科学の著しい発展とともに新しい学問の登場は大学における研究の専門化にますます拍車をかけ、既に高校においてもこの傾向に応じて教養科目の比重の低下が見られたが、とくに第二次大戦後においては、この傾向に加えて、生活水準の向上にともなう大学への進学率の急上昇はマス・プロ教育という

新しい問題を生み出すにいたった。すなわち高校において従来人文主義的教育の根幹であったギリシア・ラテン語・文学が実用的な近代語や数学によって取って代わられることにより、かつて相互の精神的共通の場であった人文主義的思想が失われ、他方学生の急増は学生同士および教師との間の密接な関係を不可能としているのである。このような傾向は西ドイツにおいてすでにやから識者によって指摘されており、最近ではこれにたいする対策として、現在の大学教育に見失われやすい人格形成の問題を再反省し、フンボルトの理念に基く「教養」を充実させる努力が真剣に行なわれている。

*

はじめにのべたごとくドイツの大学では一般教育課程は存在しないのであるから、これらの対策は高校教育、専門教育および課外活動との関連において行なわれている。いまドイツの大学において「教養」を強化するにあたって実際にいかなる方法がとられているか二、三の実例をあげ説明して見よう。まず最も手近な方法は、主として教養科目を担当する高校教育との連繫を密にすることである。

例えば教養科目を担当する高校教師が大学において講師として授業することにより、高校教育との関連においてより充実した一般教育を大学で行うことができる。また大学教師は高校における講演会、研究会等に出席し、さらに高校の卒業試験に立合うことによつて、

大学が受入れる高校卒業生の教養教育を徹底させることができる。第二には大学自体における専門教育の枠内において教養関係の講義の強化があげられる。すなわち大学は学期ごとに一般教育講義として自然、社会、人文科学関係の講義を開設し、全学部の学生に解放する。さらに学生はその専攻科目によつては、専攻科目以外に二つの副科目を選ぶことが要求される(例えば英文学を専攻する場合副科目として芸術学と生物学を選ぶというふうに)。この場合、他の学部、例えば理学部において生物学を副科目として学ぶことも許されている)。そして最終試験である国家試験または博士試験を受ける学生は、専攻科目のみでなく他の二つの副科目についても受験しなければならない。したがって学生は専攻科目のみでなく他の二つの科目においても高等

の知識を具えた社会人として大学を巣立つことになろう。

第三の方法として現在行なわれているのは学生寮の拡大と充実である。私がかつて留学したテュービンゲン大学にはライブニツ寮とよばれる寮があつて、これは共同生活および共同研究によつて一般教育を充実しようとする試みとして各界から注目されている。ここでは各自の専攻とは無関係に選ばれた学生が個室を与えられ、グループごとに討論や共同研究を行ない、さらにグループ間の緊密な連絡によつて、学問の基礎となるべき真理と人類に対する態度を学ぶことが主な目的とされる。さらに学寮は大学とは別に寮生のために一般教養関係の講義を開設し、寮生はこれに出席することが要求される。このライブニツ寮の制度は、専門化、マス・プロ化の傾向が著しい大学においてその弊害を除去するための一つの理想的な方法であるが、すべての学生を寮に収容するには莫大な費用が必要であり、また入寮を欲しない学生を強制することとは勉学の自由という原則に反することにならないかという問題を残すことになる

う。しかし現在のドイツの大学においては、経済的繁栄にともなつて国家の補助による学生寮の拡大充実が絶えず行なわれており、既に全寮制の大学の設立も検討されているところを見ると、今後とも大学における専門化、マス・プロ化にたいする対策として学寮制度が大きくとりあげられるものと思われる。最後にもっとも画期的な方法として、最近発足したボツム大学における講座制の廃止があげられよう。ここでは従来の講座制に代つて研究所が設けられ、教師と学生は講座の枠にとらわれることなく特殊研究とともに共同研究にたずさわるのであり、これによつて新しいよりひろい視野をもつ研究者が育つことになるであらう。

*

以上西ドイツの大学における一般教育の歴史と現状について簡単に述べたが、ふりかへて受験のための予備校化している高校やひたすらマス・プロ化して行く大学などが国の現状を見ると、若干参考すべき点があれば幸いである。

(法学部助教授、ギリシア・ラテン文学)

「すべての研究のなかで 最も貴重なもの……」

岩山 太次郎



アメリカ

日本の大学は、アメリカの教育機構を基にして、戦後改革されたが、アメリカの大学教育の良き面を必ずしも取り入れているとはいえない。新機構のもとで考えられた大学の理想像が幾多の面で現在歪められている。その顕著な例が「一般教育」に対する考えである。大学の教育課程の後半になされる「専門教育」にあまりにも重点がおかれすぎ、前半においてなされる、いわゆる「一般教育」は「専門教育」のための単なる準備期間、さらに困ったのは、文部省の定めによって仕方なく行なっている形式でしかないという考えである。これではアメリカの教育機構を形式だけは踏襲してはいても、「一般教育」そのものは実はまったく骨なしである。アメリカのほとんどの大学にあつては、日本で想像する以上

上に「一般教育」を重視している。「専門教育」以上に重視していると言っても過言でないほどである。

リベラル・アーツ・

カレッジと「一般教育」

アメリカの大学を大別すると、約一五〇の総合大学（大学院教育に中心がおかれている）、約八〇〇のリベラル・アーツ・カレッジ、約六〇〇のジュニア・カレッジ、それに六〇〇近いいわゆる職業教育を行なう大学の四種がある。総合大学の場合も、そのアンダーグラジュエイトにおいては、リベラル・アーツ・カレッジの場合とはほぼ同様であるから、ここではリベラル・アーツ・カレッジの「一般教育」に焦点をあわせて論を進めたい。合衆国教育局（U.S. Office of Education）

の定義によれば、リベラル・アーツ・カレッジとは“general undergraduate education”に重点をおく教育機関である。一九三〇年代四〇年代のシカゴ大学の有名な例外はあるが一般には、四カ年の勉学ののちに総合試験に合格したものに「学士」「Bachelor's degree」を与える。そして、この四カ年間の最初の二年間が「一般教育」課程にあてられているのである。この「一般教育」をGeneral educationとも言つが、多くの大学においては、学び、かつ、教えることのできる無限の知識のなかから選択されたいくつかの科目に“Liberal Arts”という名を与えている。なぜなら、スウオースモア大学の学長コートニー・スミス

の言葉をかりれば、それらの科目は「すべての研究のなかで最も貴重なもの」であり、

「直接に職業的なものでなく、また技術的な熟練をたかめるものでもない。それは、無知と偏見から人々の心を開放し、さまざまな人類の経験と文化伝統についての知識をわれわれに提供」している科目であるからである。

このリベラル・アーツの中核をなしているものは、わが国の大学における「一般教育」科目とほぼ同じく、「人文科学」「社会科学」及び「自然科学」の三つのものである。スウェーデン・スウェーデンの学校便覧によれば、リベラル・アーツのこれら三つの中核になるものの説明を次のようにしている。

一、伝統的人文科学——自己自身、ならびに個人としての仲間と自己の関係を理解し、人類の経験の不朽の価値を学ぶ。

二、社会科学——過去および現在の社会機構の特性を理解し、それに対する自己の関係を理解する。

三、自然科学——自己自身の個人的および社会的存在の外部に横たわる、有機的ならびに無機的な自然環境を理解する。

これら三系列のものは、どの大学においてもほぼ同じである。そして、これらの他に最初

の二年間に英語（国語である。国語の作文と読解）、外国語（多くの場合は一カ国語）及び体育などが課せられる。

「一般教育」課程の講義と単位

アメリカにおいても、大学入学者の増加は大問題をはらんできている。全米大学生数は一九三九年には一三五万人ほどであったのが、一九六〇年には約三六〇万人、一九六三年には約四五〇万人と増加している。当然、教授と学生との間の関係が稀薄になってきている。テレビやテープレコーダー、ラングエッジ・ラボラトリ、プログラムド・ラングエッジ等、教育に機械が導入されはじめている。多くの科目は講義の形式でなされ、学生数は四〇名ほどから一〇〇名に及ぶものもある。大クラスの科目では学生個人々々の学習進度を評価するためと個人的な質問をも可能にするためにディスカッションのための小クラス（二五〜三〇名程度）に細分しているところもある。この小クラスは週に一〜二度あり、若い教授陣（総合大学では大学院学生をティーティング・アシスタントとしてよく使

う）により、大クラスでの講義にもとずき討議や宿題の指導を行なえるようにしている。

殆んどどの科目は週に二〜三度の講義時間がある。そして、各セメスター（一年を二つの学期に分ける制度。一学期を一七週とする）またはクォーター（一年を四つの学期に分ける制度。一学期を一二週とする）で各科目は終るようになっていく（大学によつては一年を三つの学期に分けるトリメスター制を採用しているところもある）。一講時は大体一時間

にしている大学が多く、一講時のクラスのために平均二時間の準備が必要とされている。週一講時につき一単位が与えられる。従つて、一時間の講義が週三回ある科目は三単位ということになる。一学期に履修し得る総単位数は一五〜一六単位であつて、科目数にして五科目以下である。実験など多くの時間を要する科目もあるから、週四〇〜五〇時間の学習時間が望ましいとされている。

履修科目数は、最初の二年間に、英語、外国語、体育の他に、三つの中核の科目系列からそれぞれ二つほどの科目が要求されている。そして「学士」の称号を受けるためには、

四カ年間に専門科目の単位を含めて、セメスター制の場合は一二〇―一四〇単位（クォーター制の場合は一八〇―一八六単位）が要求されている。これがアンダーグラジュエイトに対する教育の一応の指針となっている。

日本の大学との相違点

このように、履修の方法においては、わが国の大学の場合と大差はないが、三つの点で、そのあり方は根本的に異なっている。

第一は、アメリカの大学の場合は、多くの日本の大学のように週一回の講義が一年間にまたがってなされるのではないことである。一年間に同数の科目数を履修する場合においても、一年間を単位とし週一回の場合と一学期を単位として週一回か行なう場合とでは、同時に履修している科目数は倍の違いがある。外国語教育において、頻度数の高いほど高い教育効果が期待出来ることが通説になっているように、あらゆる学問の分野においても同じことが言えよう。

第二の点はどの一般教育の科目においても、膨大な量のアサインメント（宿題）が課せられることである。アサインメントを十分

にしていなければ、講義にはついて行けない仕組みになっている。リーディング・アサインメントであれば、一週間に一〇〇頁程度課するのは決して多い方ではない。また、科目の成績も期末試験のみで評価する場合は少なく、常にショート・ペーパーやターム・ペーパーの提出が要求される場合が多い。

第三の点はプロベিশョン（「執行猶予」と退学の罰である。各学期において定められた最低の単位数を修得しても、平均点が最低要求点に達しない時は、「来学期も最低要求平均点に満たない場合は退学」というプロベイションが当該学生に言い渡される。普通成績はA、B、C、D、及びEまたはFで評価し、Aを四点、Bを三点、Cを二点、Dを一点、EまたはFは〇点として、履修全学科の平均点が出される。第一学年の最低要求平均点は一・五、第二学年は一・六、第三学年は一・七、第四学年は一・八と定めているところが多い。従って、どの学年においても、愈ければ、「プロベイション」、「退学」という罰が待ちうけているのである。この場合にも「一般教育」課程は専門教育課程と同じように重視されている。

世の中はよくしたもので、学生の方も「退学」ということで「もう自分の人生は破滅だ」などといった悲愴感をただよわせない。自分の能力に合った大学へ転学して行くし、大学側も「あの大学を平均点何点で退学したから、この大学に編入させてもよい」と判断すれば、転学希望者を容易に受け入れてくれる。以上私はいくつかの面から、アメリカの大学の「一般教育」の実態をみてきた。日本の大学の「一般教育」もそれに通ずるところも多い。「一般教育の危機」ということがよく言われるが、私は必ずしも現在のあり方を否定しない。しかし、日本の大学における「一般教育」課程は、少なくとも二つのことがらを検討しなければならないと思う。一つは「一般教育」が専門教育と同じように、いやそれ以上に、アンダーグラジュエイトの教育では重要であること、他は、国語教育の重要性である。これらの点に関し、アメリカの大学の「一般教育」課程、特にリベラル・アーツ・カレッジの「一般教育」課程の理念と実際はわれわれに一つの良き例を示していると思う。

（文学部助教教授・英文学）

全寮制と徹底した個人指導

北垣宗治



イギリス

イギリスの知識人にむかって、「英国の大

学では一般教育はどんな風にやっているのですか?」という質問を發したと仮定してみよう。彼は一瞬不思議そうな顔をして、一般教育とは何のことですか、とききかえずであらう。われわれ日本の大学人にとっては、一般教育とは「専門教育」の前にくるものであり（それが一般教育の正しいあり方であるかどうかはここでは問わない）、人文・社会・自然の三系列にまたがって、かたよらない人格と市民的教養を得させるための課程であり、具体的に言えば大学生活の一、二年次に受けるべきもの、というはつきりしたイメージがある。ところでイギリス人にはそのような考

え方はないのである。

イギリスの大学には一般教育の課程は存在しない。それにはいろいろな理由が考えられる。第一に、英国では大学の在学年限がふつう三年間（九学期間）であることにもよる。

三年間では、一般教育と専門教育にわたる理由がなくなるからである。第二に、英国の大学では、ドイツでも同様らしいが、技術方面の学問、すなわち日本の工学部、農学部、また時には教育学部といった学部は比較的新しい現象であり、いまだに伝統的な高等教育機関の中ではどちらかという和白眼視されているという事情がある。この傾向はオックスフォード、ケンブリッジでは特に強い。言葉を

変えていえば、英国の大学の伝統的な要素はきわめて一般教育的だということである。上にあげた両大学以外でもコレッジ・オブ・アーツ・アンド・サイエンスイズ College of Arts and Sciences というのが、大学 University の中でいちばん重要な部分を占めているといつてよい。

以上が英国の大学における一般教育についての最大公約数的な紹介であるが、じつは英国の大学といっても、歴史、伝統、制度、学風の点で各種各様であつて、その多様性は日本では想像を絶するほどである。英国には現在三十三の総合大学があるが、いちばん古いオックスブリッジ（オックスフォードとケン

ブリッジをまとめて、こう呼ぶならわしがある)は十三世紀にその起源をもつ。いちばん新しい大学、すなわちエディンバラに設立されたヘリオット・ワット大学は本年誕生したばかりなのである。ここでは便宜上、非常に古い大学と非常に新しい大学の場合をとりあげて、それぞれの一般教育の面に光をあててみたいと思う。

*

英国が世界に誇るオックスフォード、ケンブリッジの両大学は、その歴史や伝統、構造や教育方法において共通の面をきわめて多くもっている。両大学の最大の特徴は学寮制度 Colleges である。オックスフォードには三十四の、またケンブリッジには二十九の学寮があり、各学寮はそれぞれの伝統ある建物と財産をもつ自治組織である。各学寮の収入の約十二パーセントが税金として大学におさめられ、大学は大学としての総合的な運営管理を行ない、図書館、科学実験設備、総合試験、学位の授与、といった方面の仕事を担当する。オックスフォードの学生は必ずどれかの学寮に所属しなくてはならぬ。原則として全寮制であるが、近年学生数がふえたために、学寮

に所属した上で、下宿を許される学生もあるようである。一学寮には平均二百二十名のメンバーがいる。このうち約二百名が学生、約二十名がフェローと呼ばれる教師である。学生はめいめいこのチューターについて一週一時間の個人指導を受ける。チューターは担当学生の学問上の指導を徹底的に行なう。学生はすべてチューターの指導のもとに書物を読み、講義に出席し(講義の出席は自由である)読んだ本についてレポートを書き、そのレポートをチューターの面前で読まなくてはならない。チューターはそれを批評し、さらに次の一週間に読むべき書物を指定する。このような個人指導の方法がオックスブリッジの誇るやり方なのである。学生は在学中に二度の総合試験(大学によって行なわれる)を受ける。この両方に合格して、はじめて卒業が可能となるのである。

オックスブリッジの教育には、特別に「一般教育」への強調は見当らない。そこで行なわれているものは、徹底した個人指導による専門教育である。しかしそれは職業教育ではない。このチューター制と学寮制は、恐らく一般教育のねらっている目的を達成するのに

非常によい制度といえるであろう。なぜなら専門を異にするいろんな学生や教師が一つ屋根の下に住み、豪華な食堂(食堂はオックスブリッジでは礼拝堂についてすばらしい建築物である)で共に食事し、共にスポーツを楽しむ、クラブ活動に参加するからである。

*

英国では、オックスブリッジに次いで古い歴史と伝統を誇るのはスコットランドの四大学である。すなわちセント・アンドルーズ、グラスゴー、アバディーンの三大学は十五世紀に、エディンバラ大学は十六世紀にさかのぼる。これらの大学では、伝統的に神学、哲学、古典学がさかんであるが、近年には自然科学方面でもすばらしい業績をあげるようになった。エディンバラ大学が十九世紀から今世紀にかけて、世界の医学をリードしていたことは有名な話である。この四大学では、オックスブリッジにくらべて、もう少し講義のもつ比重が大きいといえよう。ここでも特別に一般教育の課程はもうけていないけれども一般教育的な科目は、カリキュラムの中で非常に大きな比重を占めている。

ロンドン大学は各種の高等教育機関、研究

機関の寄合所帯である。市内の各地に大小さまざまなコレッジや研究所が分散している。十九世紀後半に、地方都市に続々と大学がうまれた。これらの大学には「赤レンガ大学」というあだ名がついている。マンチェスターバーミンガム、エクセター、ハル等の諸大学である。これらは人文、社会、自然系列の学問以外に、その地方の産業と結びついた、特色のある学部を發展させてきた。また第二次大戦後に新しく八つの総合大学ができた。これらの大学は敢えてオックスブリッジの学寮制を採用しないで、その他の面で新しい工夫をこらしている。

*

中でも一九六一年に出発したサセックス大学は、新大学の実験としては大そう思い切ったもので、注目を集めた。この大学は九つのコースをもつ「アジア・アフリカ研究コース」「応用科学コース」「生物学コース」「教育学コース」「英米研究コース」「ヨーロッパ研究コース」「数学・物理学コース」「分子学コース」「社会学コース」である。そして、学生はコースにまたがって科目を履習選択することが

できるのである。

サセックス大学の学生は一年次の二学期が終るころ、第一回目の総合試験を受けなくてはならない。これに落第すると、三学期の終りにもう一度受験のチャンスを与えられるがこれに失敗すると大学生の資格を失う。なお第二回目の総合試験は三年次の終り、すなわち卒業前に行なわれる。これは選んだ専門コースについての徹底した試験である。ところで、この第一回目の総合試験は、一般教育科目の色合いがきわめて濃い。試験は全部で六科目。うち四科目は全学生共通である。

共通一、言語と価値——道徳的価値判断の本性、自由意志と政治的自由、責任と処罰、宗教的言語の意味、といったトピックについての論文。

共通二、歴史学入門——ブルクハルトの『イタリア・ルネッサンス期の文明』、トニーの『宗教と資本主義の興隆』という二著作との関連において、次のような問題が出る。「歴史はどのような問題を取上げ、またそれをどのように規定し、探求するか?」「歴史家たちが出す答がまちまちであるのはなぜか?」「個

人の動機・目的と、社会変化の進行との間にはどのような関係があるか?」

共通三、物質の構造と特質——熱力学の第一法則とその応用。静電現象と絶縁体。物質に関する磁性の起源。電子軌道函数。元素の周期表とその解釈。放射能。宇宙の構造と起源、等。

共通四、数学・物理学——微積分。指数函数。複素数。ヴェクトル。ドップラー効果、等。

選択一、「英文学」「ヨーロッパの悲劇と小説」「経済原理と社会問題」から一科目選択。選択二、「高等数学」「化学」から一科目選択。

こうした科目を大学入学の最初の二学期間で集中的にやらせるのであるから、英国の新設大学における、一般教育的な分野への意欲は十分にあると認めるべきであろう。

(文学部助教授・英文学)